

## 隷従している人たちへ

いまの日本政治を考えるうえで、朝日新聞3月11日の国分高史・編集委員「多事奏論」に注目した。抜粋して紹介する。

モンテニューといえ、16世紀フランスを代表する思想家だと習った人も多いただろう。ただ、その思想に影響を与えた親友の名は、そう知られていない。エティエンヌ・ド・ラ・ボラシ。ボルドー高等法院の法務官として活躍した。32歳で世を去ったが、10代の時に著した「自発的隷従論」で権力構造の本質をあげた。ラ・ボラシは、絶対王制時代の権力をこう論じる。圧政は支配する者自身が持つ力によってではなく、むしろ支配に服する者たちの加担によって支えられる。その構造は次のようにしてできあがる。1人の圧政者は数人の取り巻きを重用し、恩恵を与える。取り巻きは恩恵を失うまいと、圧政者の権力維持に加担する。取り巻きはまた自らの取り巻きに恩恵を与え、権力のおこぼれを求めて自発的に隷従する者が、鎖のようにつながっていく。

日本では長らく埋もれていたこの論文に、かねて注目していたのが西谷修・東京外大名誉教授（思想史）だ。「絶対王制でも民主制でも、権力の内実は変わらない。ラ・ボエシはその真理を明らかにした」と西谷さんは評価する、西谷さんは、いまの安倍政権が7年以上の長きにわたったのは「対米関係だけでなく、国内でも自発的隷従の構造を露骨につくり上げたからだ」と話す。それを象徴する場面だと思うのが、15年5月の党首討論だ。当時の岡田克也民主党代表が安全保障関連法案をめぐる、自衛隊の海外での武力行使についての首相の説明と法案内容との矛盾を突いた。すると、首相はこう答えた。「我々が提出する法律の説明は、全く正しいと思いますよ。私は総理大臣なんですから」それ以降、「首相は首相であるがゆえに正しい」と、閣僚や官僚らが奔走させられることになったのだと見る。

権力者の取り巻きたちの行動原理を、ラ・ボエシは記す。「この者たちは、圧政者の言いつけを守るばかりでなく、彼の望む通りにもものを考えなければならないし、さらには、彼を満足させるために、その意向をあらかじめくみとらなければならない」。森友学園問題での公文書改ざん、加計学園の獣医学部新設にいたる不透明な経緯が、いやでも思い起こされる。首相は先月にも、東京高検検事長の定年延長を認めるため、法解釈を変更したと答弁した。その後の森法務相や人事院局長のつじつま合わせは、どう聞いても破綻している。権力構造の中では、トップから遠く、下に行くほど大きな無理を強いられる。もはや限界ではないか。ラ・ボエシは、人々が自由を取り戻すためになすべきことも書き残した。「もう隷従はしないと決意せよ。するとあなたがたは自由の身だ。敵を突き飛ばせとか、振り落とせと言いたいのではない。ただこれ以上支えぬおけぱよい。そうすればそいつがいまに、土台を奪われた巨像のごとく、みずからの重みによって崩落し、破滅するのが見られるだろう」

(2020年3月15日)

